九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

位置変化を内在する状態変化表現 : 単一経路の制約をめぐって

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/2230943

出版情報：英語英文学論叢. 69, pp.1-22, 2019-03-15. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

位置変化を内在する状態変化表現

── 単一経路の制約をめぐって ──

江口　巧

1．序

英語には以下のように、状態変化動詞が位置変化を表す方向句を伴って現れる表現が存在する。

(1)　a. The cook cracked the eggs into the glass.
　　b. Daphne shelled the peas onto the plate.
　　(Levin and Rappaport Hovav (1995: 60))

ここでは、それぞれ「(卵の殻を) 割る」、「(豆のさやを) 取る」事象を表す状態変化動詞 crack と shell が、その後に、割られた卵の中身とさやを取られた豆が移動した経路を表す方向句を伴っている。

この類の構文が注目されるようになったのは、Goldberg (1991) が「単一経路の制約 (the Unique Path Constraint)」を提唱して以降である。この制約は、要するに、状態変化と位置変化の表現が単一の節において共存することを禁ずるものである。そして、この制約の反例として挙げられたのが (1) の類の構文であり、それによって、単一経路の制約の正当性に疑問が投げかけられることになった。

一見この単一経路の制約に反すると思われる (1) の類の構文に対し、反例とはならないことを説明するために独自の見解を述べたのが Levin and Rappaport Hovav (1995) および Yasuhara (2013) などである。Levin and Rappaport Hovav は、この構文で表される事象の特異性を論じ、また、Yasuhara は、この構文を独自の観点から分析し、“anchored motion” という概念を導入して、この構文が単一経路の制約の反例にはならないことを主張した。

しかし、彼 (女) らの分析はそれぞれに問題点を抱えており、十分に

説得力をもつとはいい難い。そこで、本稿では、これら先行研究の分析、特に Yasuhara（2013）の分析の問題点を指摘した上で、位置変化を内在する状態変化表現が単一経路の制約に違反しないことに対する説明の代案として、語用論的観点からの説明を試みる。それに加えて、これまで明らかにされてこなかったこの類の構文の特異性を論じてみたい。

２．単一経路の制約

議論を進める前に、まず本節では、Goldberg（1991）の提唱した単一経路の制約[1]の概要を見ておく。以下がその制約の詳細である。

(2)　単一経路の制約：項 X が物理的な事物を指す場合、ひとつの節の中で、X について二つ以上の異なる経路が叙述されてはならない。「単一の経路」の概念は次の二つの場合が規定される。(a) X はある特定の時点 t において、二つの異なる場所に移動するような叙述がなされてはならない。(b) 移動は単一の情景の中で経路をたどるものでなければならない。

（Goldberg（1991: 368））

上の「単一の経路」に関する二つの規定のうち、本稿に関係するものは（b）であるので、以降では（b）に的を絞って述べていく。

「移動が単一の情景の中で経路をたどる」というのは、「同時に異なる種類の経路が叙述されてはいない」ということであり、例えば、X が状態変化を被った場合は、状態変化に至る経路をたどったとみなされ、それと同時に、場所の移動によって物理的な移動の経路をたどった場合は、二つの異なる経路を通過したことになり、上の制約に違反することになる。この規定によって排除されるのが Goldberg（1991）の挙げた以下のような例である。

(3)　a. *Sam kicked Bill black and blue out of the room.

1　Tenny（1987: 190）の提唱する「一つの動詞句に関連づけられるアスペクトの限定（delimiting）は最大ひとつである」という制約も単一経路の制約と軌を一にするとみなしてよいであろう。

b. *Sam kicked Bill out of the room black and blue.

（Goldberg（1991: 368））

これらの文は、サムがビルを蹴った結果、ビルは青あざができ、かつ部屋の外に（蹴り）出されてしまったというものである。このような状況は現実には起こりうるが、この状況を上のように一つの節の中でまとめて描くことは、言語のコード化においては容認されないとするものである。

3．先行研究

ここでは、一見単一経路の制約に反すると思われる例に対し、独自の説明を試みた先行研究として、Levin and Rappaport Hovav（1995）および Yasuhara（2013）の分析を概観し、その問題点を指摘する。特にここでは、Yasuhara（2013）の見解に重点を置いた議論がなされる。

3.1. Levin and Rappaport Hovav（1995）

Levin and Rappaport Hovav は以下のような例を挙げ、ここではいずれも、状態変化と位置変化の双方が叙述されているとする。これは、一見したところ単一経路の制約の違反となっている。[2]

(4)　a. We broke the walnuts into the bowl.
　　b. The cook cracked the eggs into the glass.
　　c. Daphne shelled the peas onto the plate.

（Levin and Rappaport Hovav（1995: 60））

これに対し、Levin and Rappaport Hovav は、ここで描かれている事象では、いずれも二つの異なる事物が関わっているとする。すなわち、(4a) では、状態変化を被るのは（殻のついた）ナッツ全体であり、一方、位置変化を経るのは（殻を割った後の）ナッツの実であるとみなす。(4b)

2　注 1 にも述べた通り、これは Tenny（1987）の「ひとつの節にアスペクトの限定は最大ひとつ」とする制約にも反することになりうる。動詞が表す事物の状態変化によって事態が完結したとみなされると同時に、into/onto 前置詞句の使用により、事物の移動が終結点に到達したとみなされるからである。

についても、関与するのは殻のついた卵と殻を割られた卵の中身といった具合である。つまり、(4) のいずれの例においても、異なる事物がそれぞれ状態変化と位置変化という異なる変化を被っているので、単一経路の制約が示唆する「ひとつの事物につき、ひとつの変化」という制約は破られていないとしている。

Levin and Rappaport Hovav のこの見解に従えば、Goldberg の提唱する単一経路の制約は確かに破られてはいない。しかし、Levin and Rappaport Hovav が、これらの例で、たとえ問題の事物が同一の名詞句（walnuts, eggs など）で表現されているとはいえ、実際に関わる事物は“異なるもの”であるということを強調している以上、ここで描かれている事象は、それら異なる事物がそれぞれに被る異なる種の変化事象である。言い換えれば、ひとつの節の中で二つの異なる事象が叙述されていることになり、これは一般的な事象構造の制約に違反するのではないかと思われる。概念を言語にコード化する際、そこには、人間の記憶や処理能力の限界に起因する制約が課されているはずであり、その意味で、ひとつの節に二つの事象をコード化するのは、情報を解読する人間の能力に過重な負担を強いることになりはしないだろうか。このような意味でも、Levin and Rappaport Hovav のような見方をとることは、一般的な事象構造の制約という観点から見て妥当ではないと思われる。これを、(4a) を例にとり、事象構造で表すと以下のように表示される。

(5)　*[[X DO SOMETHING] CAUSE [[Y BECOME [AT-BROKEN]] AND [Z GO TO [IN BOWL]]]]

これは、関わる事物が殻のついた卵と卵の中身という、同一物の全体と部分にあたるとはいえ、異なるものとみなされるため、その違いを際立たせるため、状態変化を被る事物と位置変化を被る事物をそれぞれ Y と Z として表記している。Y と Z が関わる二つの異なる事象を同一の節内に収めることの不自然さは明らかであろう。

3.2. Yasuhara (2013)

次に、問題の事象に対し Yasuhara (2013) の行った分析を概観する。なお、この論考とほぼ同じ主旨を論じた安原（2013）も必要に応じて言及

されることになる。

Yasuharaがまず問題視したのは、Levin & Rappaport Hovav（1995）の以下の文に関する議論である。

(6)　*I broke the mirror into the garbage pail.
（Levin and Rappaport Hovav（1995: 61））

Levin and Rappaport Hovavの議論は、問題の構文で目的語名詞句は二つの異なる事物を叙述しているとするものであったが、彼女らは（6）に叙述されたmirrorについては、壊されていない鏡しか表すことができず、ここではひとつの事物が二つの変化を被ることになるため、不適格になるとする。しかし、Yasuharaは、Levin and Rappaport Hovavのこの分析では、以下のような適格な例を説明できないとする。

(7)　John broke the mirror into the trash can little by little.

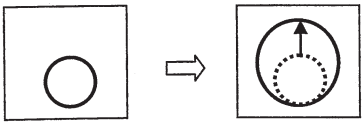
（7）は、（6）とほぼ同等の内容にlittle by littleが付加されたものであるが、Yasuharaによれば、Levin and Rappaport Hovavの分析では（7）を誤って不適格と予測することになるという。

この問題を解決すべく、Yasuharaはこの種の構文に独自の分析を行っている。まず、Yasuharaは、以下のように、人が立ち上がったり、座り込む動作を表す表現に着目している。

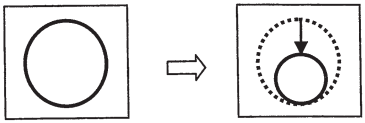
(8)　a. John stood up straight.
b. He got down into a squatting position.
（Yasuhara（2013: 356）adapted from Goldberg（1991: 373））

ここで生じている位置変化を表す方向句（up/down）と状態変化を表す表現（straight/into a squatting position）の共起については、一方がもう一方を詳述しており、単一経路の制約の違反にはならないとする。そして、ここに描かれた「立ち上がる」および「座り込む」類の動作をそれぞれ、「空間的拡大（spatial extension）」、「空間的縮小（spatial reduction）」と定義し、二つを以下のように図示している。

(9)　a.　空間的拡大



b.　空間的縮小



（Yasuhara（2013: 357））

この図から明らかなように、この種の動きでは、「動く事物は、（場所を移動するのではなく、）固定した位置にとどまって（anchored）、事物の一部が空間的に移動する」と述べている。そして、このような動きをYasuhara は anchored motion と呼んでいる。また、同様の主旨を述べた安原（2013: 102）において、空間的拡大や空間的縮小という状態変化には、この anchored motion という位置変化が内在しており、状態変化と位置変化は単一の事象を構成していると述べている。このことにより、上で見たように、状態変化と位置変化の経路は異なる経路ではなく、単一の経路をなすという見解である。

そして、Yasuhara の議論の最も重要な点は、上の（8）のようなケースに想定した anchored motion という概念を、本稿で問題としてきた位置変化を伴う状態変化の表現にも適用したことである。以下、Yasuhara の挙げた例文に沿って説明を施していく。

(10)　John emptied the bottle into the sink.　（Yasuhara（2013: 358））

Yasuhara によれば、ボトルの水を空にすると、水は必然的にボトルから離れることになる。従って、ボトルの水を空にするという状態変化は、水の物理的な移動を内在していると言える。そして、この時、ボトル自体は手の中という固定された位置にとどまり、そこから水が移動していく。このように、ここでは anchored motion が関与し、状態変化と位置変化の表現の共起が可能になるとする。

同様に、以下の（11）についても、割られた卵の殻はジョンの手の中に留まったままであり、卵の中身がボールの方向へ移動していくという。

(11) John broke the egg into the bowl. （Yasuhara（2013: 358））

ただし、この文は、ジョンが卵を割った後、殻と中身の両方をボールの中に落とすという読みでは容認されないという。

さらに、Levin and Rappaport Hovav（1995）では説明できないとされた（7）の容認性について Yasuhara は、「少しずつ」鏡を割って破片にしていくことにより、（まだ割られないで残っている）鏡の一部が固定された位置に留まるため、いわゆる anchored motion が描写されているからだと論じる。

(7) John broke the mirror into the trash can little by little.

このように、一見単一経路の制約の反例と思われる状態変化と位置変化の共起した事例については、anchored motion が関わっていることで、二つの経路は単一の経路とみなすことができ、制約の違反とはならないことを主張している。

以上が、Yasuhara（2013）の議論の要旨である。全体の議論を概観すると、anchored motion という概念を導入した独自の分析により、単一経路の制約の違反とされてきたほとんどすべての事例の容認性について、見事に統一的な説明が施されているように見受けられる。

しかし、彼の議論で最も重要と思われる部分、すなわち、anchored motion を本稿で扱っている位置変化を内在する状態変化の表現にまで応用すること自体、そもそも正しい対処の仕方と言えるであろうか。確かに Goldberg（1991: 373-374）も、既に（8）に挙げたような、Yasuhara が空間的拡大・縮小と呼ぶ事例については、ここでいう anchored motion の事例とみなし、状態変化と位置変化の表現が共起可能として、単一経路の制約の違反にならないことを認めている。

(8) a. John stood up straight.
b. He got down into a squatting position.

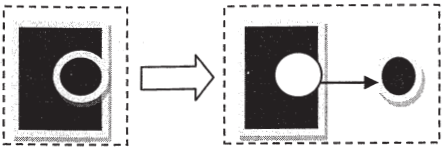
これについては、「立ち上がる」あるいは「座り込む」という状態変化は、同時に体の（一部の）空間的移動を必然的に伴うため、これらを一体化したものとみなすことについては議論の余地はない。

しかし、anchored motion をそれ以外のケースにまで拡大解釈させる扱いには、以下のような理由で疑問を抱かざるを得ない。

まず、(8) に示された「空間的拡大」および「空間的縮小」では、状態変化をする事物と空間的に移動をする事物は、常識的に考えれば同じものとみなすのが自然であろう。ジョンが立ち上がった場合を例にとると、伸び上がるという状態変化を被ったものと、空間的に低い位置から高い位置へ移動したものは、ともにジョン（の体）である。しかし、卵を割って中身をボールに落とす場合、状態変化を被るのは卵の殻であり、一方、位置の移動をするのは卵の中身である。同様に、ボトルを空にして中の水を流しに流し込む場合も、二つの変化を被る主体はボトルと中の水であり、異なっている。関与する事物は同一物の全体と部分という関係（cf. 影山（1996: 235））があるとはいえ、この関係は、空間的拡大・縮小に見られる同一物の関係とは明らかに違いがあると感じられる。

さらに、空間的拡大・縮小の場合、ジョンが立ち上がる例を再度考えてみると、既に提示した図（9a, b）で明らかなように、伸び上がるという状態変化が生じる領域と、体が下方向から上方向に移動する空間的領域は重なる。この意味からも、状態変化が位置変化を内在し、故に関与する二つの経路は単一の経路であるとみなす帰結は容易に導き出せる。しかし、卵を割って中身をボールに落とすような場合は、Yasuhara が図（12）に示しているように、卵の中身は、卵が割れる状態変化の起こった領域からは離脱していくことになる。

(12)　物理的離脱を含む空間的拡大



（Yasuhara（2013: 361））

従って、卵の中身は、状態変化の生じた卵（の殻）の位置を anchor にしているとは言え、中身が移動する経路を含む領域は、状態変化の領域と一部 anchor の位置でしか重なっていない。このような我々の事態認識があるので、卵を割るケースやボトルの水を空けるケースにまで、空間的拡大・縮小のイメージを拡張することには違和感を抱かざるをえない。そして、それがゆえに、Yasuhara が anchored motion を適用したこのようなケースでは、なぜ状態変化の経路と位置変化の経路が単一の経路をなすのかということに対する説明が、結果的に十分な説得力をもたないままになっている印象がぬぐえないのである。

また、先に不適格とされた、鏡を割ってごみ入れに捨てるケースを再度取り上げて考えるが、Yasuhara によれば、little by little を付加することで容認度が上がるということであった。

（6）　*I broke the mirror into the garbage pail.
（7）　John broke the mirror into the trash can little by little.

このことを、Yasuhara は、（7）では anchored motion の読みが可能になるからであるとしていた。ということは察するに、Yasuhara は、（6）のままでは anchored motion の読みができないと想定していると思われる。もしそうだとすれば、我々がここで当然抱いてしかるべき疑問は、卵やボトルのケースでは想定された anchored motion が、そもそも（6）に関してはなぜ想定されていないのかという点である。となると、問題の現象に Yasuhara の提唱した anchored motion の概念を導入することを排除した今、片や鏡のケースと、片や卵やボトルのケースとでは、それらを隔てる要因がどこか別の所にあるのではないかということが示唆される。こうした点も踏まえて、次節では、問題の現象を説明する代案を提示することにする。

４．代案

本稿の主眼点は、単一の経路の制約の反例と思われる状態変化と位置変化が共存する事例に対し、それが実際には制約の違反にはならないことに自然な説明を与えることである。前節までの議論で、二つの変化に関わるのは二つの異なる事物であると論じた Levin and Rappaport Hovav

(1995) や、位置変化にはanchored motionが関わるとしたYasuhara(2013) の議論を退けた今、ここではいずれの論点とも異なる語用論的観点から見た代案を提示する。

ここでは、問題の現象が単一経路の制約の違反とはならないことを説明することが狙いであるので、本稿の最初に見たGoldbergの単一の経路の制約を再度取り上げ、その趣旨を理解しておきたい。

(13)　単一経路の制約：項Xが物理的な事物を指す場合、ひとつの節の中で、Xについて二つ以上の異なる経路が叙述されてはならない。「単一の経路」の概念は次の二つの場合が規定される。(a) Xはある特定の時点tにおいて、二つの異なる場所に移動するような叙述がなされてはならない。(b) 移動は単一の情景の中で経路をたどるものでなければならない。　(Goldberg (1991: 368))

上の定義にあるように、「単一の経路」として (a), (b) 二つのケースが想定されているが、その基底にある原理はどちらも同じはずであるので、ここでは、上で本稿には関連しないとして取り上げなかった (a) の規定が該当するケースを見ておく。

(14)　John ran *into the room to the blackboard*.　(Gruber (1976: 113))
(15)　He *broke* the vase *into pieces*.

(14) では、位置変化が移動の終着点を示す二つの句によって表されており、(15) では、状態変化が主動詞と前置詞句で表されている。(14) は二つの異なる経路が明示されているものの、ジョンがたどった経路は実際には二つではなく、単一の経路である。先行するinto the roomで、移動の方向性がまず大まかに示されて、後続するto the backboardでより詳細な終着点が述べられている。これは、一方の句がもう一方の句で与えられた情報をより詳細に伝える「多重指定」(cf. Eguchi (2002)) の現象であるが、重要な点は、関わる経路はひとつであるという点である。(15) の二つの状態変化の表現についても同様のことがいえる。これらは、全体として単一の事象とみなされており、この概念化が言語形式に反映され、コード化される際にも、単一の節（あるいは動詞句）として

現れる。いうまでもなく、単一経路の制約の違反とはならない。他方、例えば、花瓶が壊れて、瞬時に全く価値のないものになったとしても、（16）のように単一の動詞句で表現することはできず、（17）のように、別々の動詞句を用いなければならない。[3]

（16）　*The vase broke worthless.　（影山（1996: 21））
（17）　The vase broke into pieces and became worthless.

要するに、我々が全体として一体化したものととらえる事象は、言語において、単独の節で表現することが可能であるということである。

今、このような見方を派生的結果構文[4]にも応用してみる。結果構文は行為事象と結果事象の因果関係をコード化した構文であるが、派生的結果構文にはさまざまな事象が表現可能である一方で、表される行為事象と結果事象の組み合わせにも制限がある。その制限を認知語用論的な観点から論じてみると、江口（2018）で述べられたとおり、二つの事象が因果関係が成立するものとしてシナリオの中に存在する場合、それぞれが行為事象・結果事象として CAUSE 関数でリンクされた結果構文として成立することになる。ここでいうシナリオとは、江口（2018）の定義によれば、「日常一般に生じる様々な事象について我々が抱く認識の総体」である。我々が抱くシナリオの中で、二つの事象が因果関係のあるものとして位置づけられていれば、それは一連の事象とみなされ、結果構文として受け入れられやすい。一方で、因果関係がシナリオから容易に導き出しにくい場合は、二つの事象の心理的距離は遠くなり、結果構文としての容認性も下がることになる。以下に派生的結果構文の例を挙げておくが、いずれも後者の例であり、容認しにくいと判断する native speaker も少なくはないと推測される。

(18)　The joggers ran the pavement thin.　（Randall（1982: 86））
(19)　She slept her wrinkles away.
（adapted from Levin and Rappaport Hovav（1995: 36））

3　意味論的に、「価値がなくなる」状態は、「壊れる」状態を詳述したものとはみなされない。
4　結果構文の中で、主動詞が状態変化を表わす動詞でない類の結果構文をいう。

さて本節での本題である、状態変化と位置変化が共存する表現が単一経路の制約の違反にはならないことに対する説明であるが、この種の表現の容認性には、今上で論じたシナリオの存在がやはり重要な影響をもってくるという見解をここではとりたい。

先ほど3.2. 節の議論の中で、同じく状態変化と位置変化が共起した表現であっても、(20) と (21) とでは、容認性の違いに見られるように、それらを区別する要因が存在することが示唆された。

(20)(= (4))　a. We broke the walnuts into the bowl.
b. The cook cracked the eggs into the glass.
c. Daphne shelled the peas onto the plate.
(Levin and Rappaport Hovav (1995: 60))

(21)(= (6))　*I broke the mirror into the garbage pail.　(ibid.: 61)

そこで、これらの文に描かれている事象を見てみると、すぐ明らかになるのは、状態変化および位置変化の対象として叙述されているものが、(20) においてはすべて食べ物であり、(21) はそれ以外のものであるという点である。そして、(20) では、いずれも食べ物がそのままの状態では食べられないために、食べられる状態になるよう準備をする過程が描かれている。その過程で、(20a) では、ナッツの殻を破り、殻を取った中身をボールに入れている。同様に、(20b) も卵の殻を割り、中身をグラスに入れるという、進行する調理の一過程を描いている。そして、これらの過程の中で、状態変化を引き起こす過程および位置変化を引き起こす過程は一連の事象とみなされる。我々が日常の諸般の事象について持っている認識の総体であるシナリオの中で、生活の中で最も重要な要素のひとつである食についての認識は特に際立ちが高いと考えられ、食材を食べられる状態へと進めていく過程は、一連の過程としてその目的も明確であり、我々のシナリオの中で慣習的な行為として定着している程度は強いと思われる。[5] 特に、(20b, c) に関わるシナリオは、「調理

5　問題の現象に対し、本稿の見解と同様に「慣習的シナリオ」に言及した研究として Goldberg (1995) がある。Goldberg は「動詞が表す行為は…(中略)…典型的に、予測可能な付随する動きを含意する」(p. 171) と述べている。しかし Goldberg は、本稿で後に論じる、二つの関与する事物が同一であるという議論は行っていない。

のシナリオ」と名づけてもよいかもしれない。[6] このようなシナリオにおいては、状態変化はその後に生じる位置変化を必然的に伴っているという意味で、「内在」していると言うことができよう。

一方、(21) に描かれた鏡を割って破片をごみ入れに入れるという行為は、不要物の処理という行為とでもみなすことができようが、目的の明確であった食に比べると、その行為は偶発的な行為であり、慣習性は低いと思われる。ゆえに、シナリオにおいて、食ほどの定着度はないと考えられ、これが (21) の容認性が下がる要因であると思われる。一方、これとはまた別の、食とは関係のない (22) のような例を筆者が作成し、３名の英語母語話者のインフォーマントに提示したところ、３名とも容認した。

(22)　He cut his nails into the trash box.

人間の爪は常に伸びるものであり、その意味で、その爪を切る行為は人間の生理に関連した行為と言え、人間が生きていくうえで、幾分深いかかわりがある行為と言えよう。その意味では、鏡を割るほど偶発的とは言えないかもしれない。しかし、切った指の爪をごみ箱に捨てるということは、上に見た食に関する状態変化と位置変化の結びつきほど一体性が感じられるとは言えないであろう。事実、ネットで“cut his/her/the nails into”という連語で検索をかけたところ、得られた用例は into の直後が desirable shape/length のような表現であり、容器を表すものはほとんどなかった。ただし、爪を切りごみ箱に捨てる行為は、確かに我々が日常的に行う行為のひとつではあり、シナリオには慣習的行為として存在すると言えなくもなく、その意味で、３名のインフォーマントにとっても、これを一連の行為としてイメージすることは比較的容易であった

6　この点、言語の違いがあるとはいえ、もし日本語に、卵を割って容器に入れる一連の動作を表す複合動詞が存在すれば、この事象に関わる状態変化と位置変化を一体化した事象とみなすことを正当化するひとつの根拠となりうるであろう。影山（1996: 235）は料理用語として「(卵を）割り入れる」という表現があるとし、事実、ネットで検索しても、かなりの数の用例がヒットする。しかし、この複合動詞が一般に定着しているかとなると、必ずしもそうとは言えないようである。筆者が尋ねた日本人でも、この語を耳にしたことがあると答える人は少ない。

と推測される。

Yasuhara が容認性が上がるとして挙げていた「鏡を割る」事象を描いた以下の例であるが、筆者の考えでは、日常では「鏡を割る」という偶発的とされる行為が、little by little という句を付加することにより、行為につぎ込む慎重さが強調されることで、ある程度目的の明確な行為という性格が増す（と同時に偶発性が薄れる）からではないかと思われる。すなわち、シナリオの中におけるこの一連の行為のもつ意味合いが幾分増すことになるからではないかと思われる。

（7）　John broke the mirror into the trash can little by little.

以上の議論をまとめると、位置変化を伴う状態変化の表現は、それらが表す二つの連続する事象が、我々が日常諸般の事象に関して抱くシナリオの中で、明確な目的をもち、際立つ行為として定着していれば、その表現は一体化した事象として、当該の構文で使用可能になるということである。そして、その場合、位置変化は状態変化に内在するものとみなされ、ゆえに、それぞれの変化を表す経路は、別個でなく、単一の経路をなすとみなされる。このことにより、当該の表現は、Goldberg（1991）の提唱する単一経路の制約に違反することにはならないということが自然に説明されるのである。

さらに、このことに関連して筆者の考えを述べておくと、（20）において容認された一連の事例において、確かに状態変化を被る対象と位置変化を被る対象は、厳密にいうと、全体と一部の関係にあるとは言え、異なるものであった。（20b）に関して言えば、前者が殻のついた卵全体、後者が殻を割った後の卵の中身である。しかし、人間がこの事象を概念化する際には、関わる二つの事物は卵の（全体と一部という）異なる部分といった区別をするのではなく、同一の卵とみなしていると考える。そして、卵が割れる事象とこれと同一の卵がボールに落ちる事象を連続するひとまとまりの事象とみなしていると考える。そして、人間のこの概念化が言語にコード化される際も、同じひとつの egg として具現化するという考えである。したがって、（20b）について想定される事象構造としては以下のようなものを考える。

(23) [[X DO SOMETHING] CAUSE [[Y BECOME [AT-CRACKED]] AND [Y GO TO [IN GLASS]]]]

これは、既に Levin and Rappaport Hovav（1995）の見解に沿った場合という想定で提示した容認されない（5）の事象構造と比較すれば、その違いは明らかである。

(5) *[[X DO SOMETHING] CAUSE [[Y BECOME [AT-BROKEN]] AND [Z GO TO [IN BOWL]]]]

(23) では、CAUSE 以下の二つの下位事象に関与する対象が同じ Y で表記されている。これが人間の世界の概念化をより自然に反映した事象構造だと思われる。

なお、今論じた二つの変化に関与する対象は同一物であるという見解は、既に挙げた以下の例文についてもあてはまることを最後に付記しておく。

(10) John emptied the bottle into the sink.

ボトルを空にした後で、流しに流し込むのも、人間の認識では水ではなく、ボトル（の中身）であると考える。そうでなければ、人間はこの事象を“John emptied the bottle and poured the water into the sink.”とコード化するはずである。もちろんこの表現も可能ではあるが、重要なのは、(10) のような表現が可能だという点である。このことは、上に述べた概念化、すなわち、関わるのは同一のボトルであるとする概念化が可能であることをまぎれもなく表している。

５．この構文の特異性

前節では、問題の構文が単一の経路の制約の違反とはならないことをシナリオと絡めて説明したが、本稿の最後に、従来あまり指摘されることのなかったこの構文の特異性をいくつか述べておきたい。

まず、一般的に事象構造としてはさまざまなものが想定されうるが、その中で、いくつかを取り上げ、例えば activity, state, caused motion の事

象構造を想定してみよう。

（24） activity: ［X ACT］
（25） state: ［X BE AT-STATE］
（26） caused motion: ［［X ACT ON Y］ CAUSE ［Y GO TO PLACE］］

これらに描かれる事象は、例えば、activity であれば活動を表す動詞、state であれば状態を表す形容詞およびその他など、意味的条件を満たせば、どのような述語も生起可能である。同様に、caused motion も、意味的に条件がかなう動詞および経路句であればどのようなものも受け入れられる。例えば、（27）のような表現の場合、経路句が表す終着点はほぼ何の制約も受けず、the field の部分は基本的に場所を表すものであれば、いかなる名詞句にも置き換えられる。

（27） He threw the ball to the field.

しかし、本稿で扱ってきた位置変化を内在する状態変化の表現は、叙述される事象として無制限に許すわけではなく、ある程度の厳しい制約がかかってくる。すなわち、本稿で論じてきたように、描かれる二つの事象は、我々がもつシナリオに存在し、慣習的な行為として定着した一連の事象とみなされるものでなければならない。同じ状態変化動詞 break であっても、break the egg into the bowl は問題ないが、break the mirror into the garbage pail では容認されにくいのは既に見た通りである。その意味では、４節で論じた（派生的）結果構文も同様のことが言える。結果構文では、行為事象と結果事象は、シナリオの中で二つの事象が因果関係のあるものとして位置づけられていなければならないと論じた。そのような位置づけのなされない事象は結果構文に描かれてもその容認性は下がる。このように、ともに描かれる事象がシナリオの制約を受けるという意味で、位置変化を内在する状態変化表現と結果構文は共通の特徴を持っている。

上に見た特徴の原因を探ってみた場合、これらの二つの構文と、上に挙げた（24）～（27）、特に（27）の caused motion との明らかな違いは、結果構文や位置変化を内在する状態変化の構文では、構文全体の意味

が、主動詞の意味構造からは導かれないという特徴がある。(27) においては、主動詞の throw が意味的に物理的移動を含意（entail）し、後続する経路句はその移動の方向を明示しており、このことから、構文全体の意味は、主動詞の意味構造をそのまま反映していると言える。一方、結果構文全体の意味は、構文の各構成要素の意味を合成した構成原理によっては導かれない。

（28）　a. He hammered the metal flat.
　　b. They ran the pavement thin.

(28a) の結果構文においては、本来状態変化を含意しない動詞 hammer が用いられているにもかかわらず、目的語名詞句の結果状態を表す flat が現れている。同様に（28b）においても、自動詞 run は、目的語と結果述語の連鎖 the pavement thin を選択しない。このように主動詞によって選択されない要素は、「構文」によって意味役割を与えられている（cf. 江口（2012））。そして、本稿で取り上げた位置変化を内在する状態変化表現も、単に動詞の意味のみを考慮すれば、状態変化を表しており、移動の意味は含意（entail）されない。従って、この構文でなぜ位置変化を表す表現が可能かというと、その原因は動詞そのものの意味に帰することはできず、これまで論じてきたように、状態変化を、時間的に連続して生起する位置変化事象と自然に結びつけるシナリオという語用論的概念に依存しなければならない。このような意味で、構文全体の意味は主動詞のそれから直接的に引き出すことはできないのである。このように考えると、主動詞の意味構造に直接的に依拠しない構文には、描かれる事象に何らかの制約が課されると言ってよさそうである。

次に、位置変化を内在する状態変化表現のもう一つの特異性を、文末に生じる位置変化を表す方向句に焦点をあてて論じてみたい。まず、問題の構文と同じ状態変化動詞 break が現れた以下の構文を考えてみる。

（29）　He broke the egg into two halves.

文末に生じている“into two halves”は、卵が割れた状態をさらに詳述しており、いわゆる多重指定の表現となっている。これは、本稿で扱って

きた位置変化を内在する状態変化の表現とは異なり、本来的結果構文である。本来的結果構文は、興味深いことに、既に先行研究で指摘されている通り（cf. 小野（2011））、結果句は into 前置詞句だけでなく、in 前置詞句も可能であるとされている。

（30）　John broke the stick {in/into} pieces.　　（小野（2011: 131））

つまり、本来的結果構文では、into 前置詞句による結果状態に至る「過程」ばかりでなく、in 前置詞句による最終的な結果状態をも許容するとされている。このことを確かめるべく、Google 検索により、“break the egg into/in two”の連鎖に関して、into および in の出現例の数を調べてみた。また同時に、break the egg と同様に出現数の多い crack the egg についても同様の連鎖で調べてみた。[7] 以下にその結果を示す。

（31）　a. “break the egg into two”　26件
　　“break the egg in two”　9 件
　　b. “crack the egg into two”　24件
　　“crack the egg in two”　16件

意外にも全体的に検索結果のヒット数は多くはなかったが、当初の予想通り、break/crack の場合ともに into/in 双方を許容することが明らかになった。

次に、本稿で扱ってきた、同じ動詞句 break/crack the egg が用いられているものの、後に位置変化の表現を伴った例について、その出現数を調べてみた。割れた卵が最終的に到達する容器は bowl に限定して調査を行った。以下がその結果である。

（32）　a. “break the egg into the bowl”　167件

7　「卵を割る」例は、レシピとして用いられるケース、すなわち命令形での出現が多いであろうという予測から、検索は動詞の現在形で行った。また、検索は “break/crack the egg into/in two” の連鎖を調査したが、この場合は、into/in 句が two で終わる場合のみでなく、two parts あるいは two halves と続く場合もあることを想定している。

“break the egg in the bowl”	32件
b. “crack the egg into the bowl”	約17,100件
“crack the egg in the bowl”	66件

この数字に示されるとおり、状態変化と位置変化が共存する場合では、本来的結果構文の場合と異なり、位置変化の表現としては圧倒的に into の出現数が多いことが明らかとなった。このことから言えるのは、この構文は、卵を割るという状態変化とそれに続く卵の位置変化を一体化した事象として描写する構文であるが、後者の位置変化の事象は、事物の最終的な位置というより、そこに至る変化の「過程」を明示する要請が極めて高いという点である。しかし、このことは、上に述べた本来的結果構文との意味の違いを考えれば、自ずと説明がつくと思われる。つまり、本来的結果構文では主動詞に break のような状態変化動詞が用いられているため、状態変化は動詞によって含意される。従って、後続する結果句は、結果状態に至る「過程」を明示することを必ずしも要請されず、in 前置詞句も頻繁に現れる。一方、位置変化を伴う状態変化表現の場合、本来的結果構文とは異なる意味を表すため、たとえ主動詞が状態変化を表すものであっても、その後の位置変化を描写することも構文の意味の表出にとって重要な部分となる。そのため、最終的な位置に至る変化の「過程」を明示する必要性が必然的に高くなると言える。位置変化として圧倒的に into の出現が優勢を占めるのもそのためである。いずれにせよ、同じ状態変化動詞が現れながら、後続する位置変化事象の表現には、本来的結果構文とは異なる範疇の前置詞句の要請が強いという点も、この構文の特異性を顕著に表すものと言ってよいであろう。

６．結論

本稿は、位置変化を伴う状態変化の表現が、二つの表現が共起することを禁じた Goldberg（1991）の「単一経路の制約」に違反するのではないかという見解に対し、その制約の反例とはならないことを示すために、語用論的観点からの説明を試みたものである。

まず、同じ問題に取り組んだ先行研究として、Levin and Rapaport Hovav（1995）と Yasuhara（2013）を取り上げた。Levin and Rapaport Hovav は、状態変化と位置変化に関与する事物がそれぞれ異なるため、

単一経路の制約が示唆する「ひとつの事物につき、ひとつの変化」という制約は守られていると論じたが、この見解が示唆する事象構造では、CAUSE 以下の下位事象に二つの異なる事物がそれぞれ関わる二つの事象が併存することになり、単一の節に二つの異なる事象を収めることの不自然さが指摘された。一方、Yasuhara は、この問題に対し独自の観点から分析を行い、この構文に関わる状態変化と位置変化の事象に、空間的拡大・縮小に見られるのと同じ anchored motion の概念を適用し、関わる二つの経路は単一の経路をなしており、制約の違反にはならないと論じていた。しかし筆者は、Yasuhara の議論の前提となる、anchored motion を問題の現象に適用すること自体の不自然さを指摘し、二つの経路が単一の経路であるとする Yasuhara の議論は十分な説得力をもちえないとした。

そこでこの問題の説明の代案として、本稿では、江口（2018）によって導入された、我々が日常生起する諸事象に対して抱く認識の総体である「シナリオ」の概念を援用し、このシナリオにおいて、相前後する状態変化と位置変化の二つの事象は、明確な目的をもち、慣習的に定着した、認識的に際立ちの高い行為を表すものでなければならないとした。そして、この場合、これらの一連の事象は一体化した行為とみなされ、状態変化とそこに内在する位置変化の経路は、単一の経路をなすと説明された。そして、シナリオにおける一連の行為の定着度の度合いによって容認性が変わってくる二つの表現、break the egg into the bowl/*break the mirror into the garbage pail をこの見解の根拠とした。さらには、問題の二つの事象に関わる事物は、厳密に言えば、例えば卵全体と卵の中身という異なる事物であるが、人間が経験する世界の概念化においては、これらの事物は単一で同一の事物であるとみなされ、これがコード化の際にも反映され、単独の目的語として具現化すると論じた。

最後に、他の構文と異なるこの種の構文の特異性を論じた。他の構文では、主動詞が要求する意味に合致さえしていれば、基本的にどのような事象も描写が可能である一方で、ここで扱ってきた位置変化を内在する状態変化の構文では、描かれる事象がシナリオに存在するものでなければならないという語用論的制約に従うことを見た。この点、同様の制約を受ける派生的結果構文と共通しており、ともに構文全体の意味が動詞のそれからは直接的に導き出せないという特性をもつことが論じられ

た。また、問題の構文の二つ目の特性として、同じ状態変化表現の用いられた本来的結果構文と異なり、この構文では、状態変化表現に後続する位置変化表現として、in 前置詞句よりも into 前置詞句が圧倒的に優勢であることを Google 検索によって確かめた。そして、このことの説明として、本来的結果構文とは異なる意味を表出するため、後続する位置変化表現の重要性を指摘し、そのために、この変化の「過程」を明示することの要請が高まるとした。

本稿の主旨は、位置変化を内在する状態変化表現の適格性が、シナリオという我々が世界に対して抱く認識の総体、すなわち語用論的知識に大きく依存することを主張することである。影山は2005年の論考で、英語の結果構文の成否に（詳細は省略するが）クオリア構造の目的役割や主体役割が深く関わっていることを論じた。これらの概念は、「従来、語用論的情報と見なされてきたもの」（影山（2005: 97））であり、ここでは、結果構文などの領域において、文法の一部に語用論的知識が組み込まれているとの主張がなされている。影山のこの見解に沿えば、本稿での議論においても、位置変化を内在する状態変化表現の成否に語用論的要因が深く関わっていることが明らかとなった。そのような意味で、文法に占めるいわゆる「百科事典的知識」の果たす役割を論じる試みにおいては、本稿の議論もその重要な一端を担いうるのではないかと考える。

参照文献

Eguchi, Takumi（2002）“Coordination of Path Phrases in English,” *English Linguistics* 19. 2, 142-160, The English Linguistic Society of Japan.

江口巧（2012）「結果構文のアスペクト」『九州英文学研究』第29号，13-21，日本英文学会.

江口巧（2018）「修辞的効果をもつ結果構文」『英語英文学論叢』第68集，49-70，九州大学大学院言語文化研究院英語科.

Goldberg, Adele E.（1991）“It Can’t Go Down the Chimney Up: Paths and the English Resultative,” *BLS* 17, 368-378, University of California, Berkeley.

Goldberg, Adele E.（1995）*Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.

Gruber, Jeffrey（1976）*Lexical Structures in Syntax and Semantics*, North-Holland, Amsterdam.

影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版，東京.

影山太郎（2005）「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」『レキシコンフォーラム』No. 1，影山太郎（編），65-101，ひつじ書房，東京.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav（1995）*Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Seman-*

tics Interface, MIT Press, Cambridge, MA.
小野尚之（2011）「英語結果構文の固有性と類型的特性」*JELS* 28, 129-135, 日本英語学会.
Randall, Janet H.（1982）“A Lexical Approach to Causatives,” *Journal of Linguistic Research* 2, 77-105.
Tenny, Carol（1987）*Grammaticalizing Aspect and Affectedness*, Doctoral dissertation, MIT.
Yasuhara, Masaki（2013）, “A Modification of the Unique Path Constraint,” *JELS* 30, 355-361, 日本英語学会.
安原正貴（2013）「事象構造と単一経路制約：空間的尺度変化に関わる位置変化と状態変化」日本英文学会第85回大会 Proceedings, 101-102.